



川系男子の『川と人』めぐり No. 17～東北地方の川～

坂本貴啓（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

『川と人』
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしょうがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

♪村の鎮守の神様の 今日ではめでたいお祭り日 ドンドンヒャララドンヒャララ ドンドンヒャララドンヒャララ 朝から聞こえる笛太鼓

（唱歌『村祭り』 作詞：不詳，作曲：南能衛）



図1 東北地方を旅した松尾芭蕉

1. 奥の川道へ

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。
舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむか
ふる物は、日々旅にして旅を栖とす。

（松尾芭蕉『奥の細道』より）

これは松尾芭蕉（図1）の「奥の細道」の冒頭であるが、僕もこんな川の旅人でありたいものだ。

2013年8月4日～16日にかけて東北地方の川に調査で出かけた。東北地方には13の1級水系があり、この調査を終えると九州地方20水系、中国地方13水系、四国地方8水系を合わせて54水系の調査が終わり、約半分の1級水系を訪問したことになる。

今回はたまたま別件で、古賀河川図書館の古賀邦雄さんが上京されてきており、ずっと一緒に東北の川を旅することになった。まるで古賀さんが芭蕉で、僕が弟子の曾良のような旅だ。（途中、大学の仲間が合流してくる行程になっている。）奥の細道ならぬ、奥の川道を旅した13日間の記録。芭蕉に習って僕も俳諧を味わいつつ川と人を巡りたい。では早速一句。

表1 東北地方『川と人』めぐり訪問先

	曜日	午前	午後	
8月4日	日		青森入り	青森ねぶた
8月5日	月	岩木川	岩木川	青森河川国道事務所 青森県庁 あおもりの川を愛する会 岩木川と地域づくりを考える会 津軽ダム（建設中） 弘前ねぶた
8月6日	火	奥入瀬川 馬瀬川	高瀬川	十和田湖 奥入瀬川 高瀬川河川事務所 NPO法人水迎の菜花まべち 小川原湖 高瀬川放水路
8月7日	水	北上川	米代川 （ミツカン水の文化誌取材）	岩手県庁 岩手河川国道事務所 米代川上流域
8月8日	木	米代川 （ミツカン水の文化誌取材）	米代川 （ミツカン水の文化誌取材）	米代川上流域
8月9日	金	米代川 （ミツカン水の文化誌取材）	米代川 （ミツカン水の文化誌取材）	米代川中流域
8月10日	土	米代川 （ミツカン水の文化誌取材）	米代川 （ミツカン水の文化誌取材）	米代川下流域 八郎湯 雄物川
8月11日	日	雄物川	子吉川	玉川ダム 田沢湖 NPO法人田沢湖ふるさとふれあい協議会 NPO法人秋田パドラーズ アクアパル 子吉川市民会議
8月12日	月	雄物川	雄物川	秋田県庁 秋田河川国道事務所 湯沢河川国道事務所
8月13日	火	最上川 赤川	最上川	日和田（最上川河口） 酒田河川事務所 NPO法人鶴岡淡水魚夢童の会 新庄河川国道事務所
8月14日	水	最上川	最上川	山形県庁 山形河川国道事務所 美しい山形・最上川フォーラム NPO法人 最上川リバーツーリズムネットワーク 長井ダム 長井市役所
8月15日	木	北上川 鳴瀬川	名取川	水と緑の環境フォーラム・ものう 脇谷洗堰 北上川下流河川事務所 水環境ネット東北 宮城県庁 東北地方整備局 仙台河川国道事務所
8月16日	金	阿武隈川	阿武隈川 東京着	福島河川国道事務所 福島県庁 荒川資料館 ふるさとの川・荒川づくり協議会 猪苗代湖

夏の川 行かふとするは みちのくの

奥の川道 導かれんかな

-八月四日 はやぶさにて 貴啓 詠む -



図2 青森ねぶた（青森は人形型）



図3 弘前ねぶた（弘前は扇型）

2. お祭りに迎えられて

新青森駅に着いたのは夕方であった。開通して間もない東北新幹線の新しい駅舎には大勢の人で溢れていた。乗り換えのため、在来線に乗るが、東京の終電ほどの乗車率。いくら夏休みとはいえこれは何かおかしい。

よくよく知ると、この数日間青森ねぶたの真っ最中であった。日本の伝統芸能の一つとして、テレビや雑誌で紹介されているのは見たことがあるが、実物を見たことはないの、ちょっと見学していくことにした。

青森駅で下車し、駅を出ると活気で溢れかえっていた。日没が近づくに連れて人の通りも多くなってきた。大通りにはねぶたの衣装を着た人も多くいる。大人から中高生から小さな子供まで。楽しそうに友達と話していたねぶた衣装の高校生に古賀さんが質問。「あなたたちはその衣装でねぶたと一緒に踊るの？」すると高校生「踊るんじゃなくて、跳ねます。」跳ねる？いったいどんなものかよく分からなかったが、「もう少し暗くなったら分かりますよ。」と言われねぶたの登場を待った。

あたりもすっかり日が落ち、遠くから太鼓の音や笛の音が聞こえ始めた。明々とした大きな人形ねぶたが堂々と大通りを行き、通ったあとにねぶた衣装をきた集団が練り歩き、腰に色鮮やかな鈴をたくさんつけて、跳ねる度にじゃらじゃら鳴らしている。跳ねるとはこのことだったかとうやうく分かった。それにしても老若男女楽しそうに跳ねている。東北の短い夏を思いっきり楽しむように「ラッセラー、ラッセラー！」と掛け声が夜空をこだました。

古賀さんもねぶたは初めてで心底感動されたようで、ここで一句。

母と子の 髪型同じ ねぶたかな

-八月四日 青森市内にて 古賀邦雄 詠む-

3. 青森の川づくり（岩木川）

（青森河川国道事務所/青森県庁/あおもりの川を愛する会/岩木川と地域づくりを考える会/津軽ダム）

8月5日（2日目）は青森河川国道事務所、青森県庁を訪問し、青森の各河川の情報を提供してもらった。（調査に関する内容が事務的であるため、毎回さらっとしか書いていないが、各行政機関の河川管理者の方には大変ご協力をいただいております、この場を借りて感謝申し上げます。）

午後からは青森県内の2つの市民団体の方にお会いした。最初に「あおもりの川を愛する会」を訪ねた。この会は1997年の河川法改正を機に、青森の川の文化の発展を目的に1998年に設立された団体である。会は青森県内の川別に4つのサークルをつくっており、参加者はどれかのサークルの活動に参加するという仕組みだ。サークルという気軽さがあり、楽しく参加できそうだ。

次に「岩木川と地域づくりを考える会」を訪ねた。この会は3年前から活動を休止状態にある。一時期は岩木川流域で盛んに活動していたお話を伺ったが、構成員の高齢化や会員の多忙により、休止を決めたという。まだ再開の目途は立っていないようだ。他にも青森県内では休止や解散した団体の話を各所で耳にした。青森だけに限ったことではないが、全国的に市民活動の変化の時期に差し掛かっていることは確かだろう。

岩木川に関してたくさんお話を伺った後、岩木川を訪ねることに。上流域、下流域両方を訪ねる時間がないので、上流域のみ行くことにした。上流に建設中の津軽ダムがある。目屋ダムの堤体をそのまま残しつつ、数十m直下流により高い堤体を建設中であり、完成すると有効貯水容量は目屋ダムの約4倍になる（3,880万m³⇒1億4,090万m³）。夕暮れのダム建設現場は綺麗だった。川を下り、弘前市内に戻った頃、ちょうど弘前ねぶた（図3）に出くわしたので見学することに。ここで古賀さん一句。

旅人も 引き加わりし ねぶたかな

-八月五日 弘前市内にて 古賀邦雄 詠む-



図4 十和田湖と乙女の像



図6 馬淵川

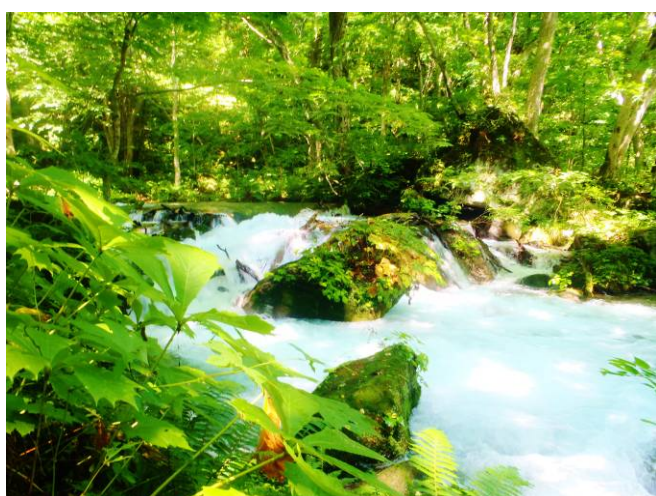


図5 夏の奥入瀬溪流



図7 馬淵川水辺の楽校

4. 清らかさ、美しさ、そして神々しさ (十和田湖・奥入瀬川)

朝目が覚めると湖の湖畔にいた。(昨夜は遅くまでねぶたの熱気に酔いしれ、夜遅くに十和田湖の湖畔の宿に到着していた。)朝起きてちょっと湖畔を散歩してみることに。まだ少し冷たい空気が残った静かな湖畔は朝日とともに輝きを増そうとしていた。湖面を覗き込むと湖の底が見えるほどの美しさで透き通っている。十和田湖はカルデラ湖であり、透視度が非常に高い。湖畔を散歩していると森の中に十和田神社、天ノ岩戸、日ノ神、金ノ神、山ノ神、火ノ神、風ノ神の岩戸がある。それぞれの神様に参る。大地を構成する神々が鎮座しているのに、なぜ、水の神だけ居ないのか。おそらくこの湖そのものが御神体なのだろう。この湖はそんな風を感じさせる神々しさがある。湖畔には『乙女の像』(図4)がひっそりと建っている。

十和田湖の子の口付近には、十和田湖からの水が流れ出る奥入瀬川の起点がある。十和田湖から豊富な水がどんどん流れる。緑の茂った森の中を流れる溪流の美しさは日本人の風流心の源すら感じさせる風景であった(図5)。十和田湖から水を分けた清流は下流へ清・美・神を広げるのであった。

5. 子どもに馬淵川の水辺の楽校を(馬淵川)

奥入瀬川を中流域まで下ったのち、一旦馬淵川の八戸方面へ。(「まぶちがわ」ではなく、「まべちがわ」と読む。)「NP0 法人水辺の楽校まべち」の代表の池田光則さんを訪ねた。この会も前年より構成メンバーの身体上の都合などの諸事情により休止状態であるそう。

会が設立するきっかけは子供が外で遊ばなくなり、学校が荒れる現状を憂いた池田さんらは、2000年に里山で遊ぶための会を設立。それから数年後、馬淵川に子どもの水辺が整備されることをきっかけに水辺の楽校推進協議会を経て、NP0 法人水辺の楽校まべちを2005年に設立。馬淵川の舟渡付近は水辺の楽校として親水空間が形成されており、子供達を川にいざなう工夫がほどこされている(図6、図7)。一か所の水辺の楽校の整備で、両岸ともに整備された例は全国的にもめずらしい。

また、せせらぎ水路は湧水が湧き出ており、湧き出た湧水によって水路が形成されている。しかし、東日本大震災後は水脈が変わってしまったようで、少し不安定な湧き方だそう。

子どもに馬淵川の水辺を提供したい大人の想いがこの会を発展させたのだろう。



図8 小川原湖と姉妹の像



図10 仏沼（ラムサール条約登録湿地）



図9 高瀬川放水路

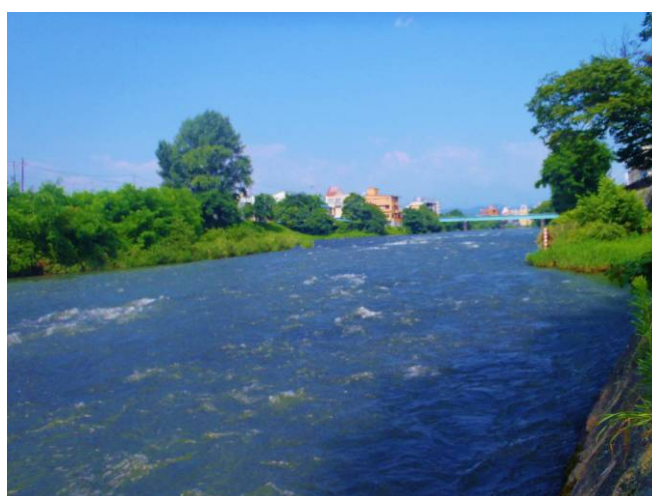


図11 夕顔瀬橋からの北上川

6. 小川原湖の伝説、オオセッカの楽園（高瀬川） （高瀬川河川事務所/NPO 法人おおせっからんど）

「今から1300年ほど昔、世の無常をはかなみ都より行方不明となった父を探す二人の姉妹がいた。姉妹がたどり着いたのは最果てのこの湖で、父は既にこの世にいないことが判明。姉の玉代姫、妹の勝世姫ともに悲しみのあまり湖に身を沈めてしまう。のちに姉の沈んだ湖を姉沼と呼び、妹の沈んだ湖を妹沼（現在の小川原湖）と呼ぶ。」（小川原湖伝説より）

小川原湖にたどり着いた時にはあたりに霧が立ち込めていて、湖面を覆い尽くしていた。湖の伝説の姉妹の像は静かに立ち尽くしていた（図8）。小川原湖は高瀬川水系の湖沼で、小川原湖より下流約6kmに渡り高瀬川が続く。一方で小川原湖から流れ出るもう一方の河口（高瀬川放水路（図9））が小川原湖から約2kmまっすぐに太平洋まで注いでいる。1級河川にしては小さな放水路だが、立派な河口堰もある。

また、この小川原湖付近はオオセッカの生息地として有名で、周囲の仏沼はラムサール条約登録湿地として指定を受けている（図10）。（「NPO 法人おおせっからんど」の方によると、オオセッカは1～2mの背丈の草本群落の中にしか生息しないようだ。）高瀬川の静かな流域は、生き物の楽園。

7. 北上川の背骨を形成する三川合流（北上川） （岩手県庁/岩手河川国道事務所）

青森を後にし、岩手県盛岡市へ。盛岡市では、北上川が雫石川と中津川と合流する。ここで北上川は背骨を大きくして、岩手県を南流し、宮城県石巻市まで流れ太平洋に注ぐ。流路延長249km、流域面積10,150km²でさすがは東北最大の大河だ。全国でも5本の指に入る長い川だ。

市内の夕顔瀬橋から北上川をみると、滔々と流れており、さらに下流の三川合流地点でもっと流れを大きくする。今回の旅程では北上川を南下しないため、次に北上川に会うのは8日後に石巻市内で下流域であるが、下流での再会を誓い、夕顔瀬橋を後にした。私の夕顔瀬橋の心情を詠む。

瀬を早み 盛岡流れゆく 北上に

下で再び 会わんと誓ふ

—八月七日 夕顔瀬橋にて 貴啓 詠む—



図 1 2 米代川を旅した仲間たち (2010 年)



図 1 3 ゼミ合宿の解散式はいつも河口 (2010 年)

8. 再びの米代川 (回想)

盛岡市内を周ったのち、今度は米代川へ。ここからは調査はいったん中断して、ミツカン水の文化センターの米代川取材に合流。

ミツカン水の文化誌 44 号から私が担当する川めぐりの連載「Go!Go!109 水系！坂本クンと行く川巡り」で第 2 回目の特集は米代川 (2013 年 11 月発行予定)。なので、紹介はここでは控える。

米代川は過去に一度来たことがある。2010 年 8 月のゼミ合宿で 3 泊 4 日の旅をした。僕がまだ 4 年生の頃で、自分にとって川を視かたを学んだ深く思い入れがある川だ。流域界、ダム巡り、カヌー、登山、川遊び、流域で出会った人々、河口の解散式。流域の各所での記憶は色褪せることなく、時間が経つに連れて輝きを増す。あれから 3 年。再び米代川を訪問する機会がきた。ゼミ合宿で周った箇所を巡りながら過去の思い出も蘇る。同じ美しい風景、流域の人との再会。ちょっと違うのはあの時一緒に旅した仲間がいないこと。再訪問はそんな過去との重なりを探す旅となった。速報に関してはミツカン水の文化センターの編集長の取材日記を参照されたい。

(編集長日記 http://www.mizu.gr.jp/diary/index.html#20130823_02)

水面に 映り込むのは 夏色のみ

-八月七日 米代川にて 貴啓 詠む-



図 1 4 夕暮れの八郎潟調整池



図 1 5 雄物川花火大会 (7,500 発)

9. 八郎潟経由の雄物川 (八郎潟, 雄物川)

8 月 7 日～10 日の取材を終え、調査再開。本来ならそのまま田沢湖へ向かう予定だったが、8 月 9 日の豪雨災害で国道 46 号線が分断されてしまい通れず。

しかたないので、日本海側を経由して、一旦秋田市に出て、それから雄物川を登って行くコースに変更した。かなりの回り道だ。(後半調査に駆け付けてくれた友人も盛岡経由の秋田新幹線が使えないため、山形経由で秋田駅集合に。)

日本海側を経由していくということで、秋田に南下する途中で八郎潟付近を通るので八郎潟に立ち寄ることに。八郎潟は江戸時代から干拓により、新田開発が盛んに行われ、湖面の大半は農地となってしまった。現在は調整池 (図 1 4) がわずかな割合残るだけであるが、それでもかなり大きい。江戸時代の八郎湖がいかに大きかったか想像できない。八郎潟を巡ったのち、秋田市に到着。到着した頃には真っ暗で遠くからどーんどーんと音が聞こえる。琴の聞こえてくるのは雄物川の方から。ちょうど雄物川の花火大会 (図 1 5) だったようで、河川敷には多くの出店が並び、夏の夜涼みを楽しんでいる。雄物川から打ち上げられる 7500 発の花火は圧巻だった。たまには回り道もするものだ。



図 1 6 田沢湖と辰子姫

10. 田沢湖が少年の心の氷を溶かす (玉川ダム, NPO 法人田沢湖ふるさとふれあいづくり協議会)

夜遅くに田沢湖付近の民宿に到着した。ふと見上げた星空の美しいこと。空中に星を散らしたようだ。

翌朝、「田沢湖ふるさとふれあい協議会」の田口久義さんを訪ねた。

1980年代に学校現場が荒れた時代、修学旅行を組むとどこの観光地も「何をされるかたまったもんじやない。」と荒れた学校の対応を断った。そんな時、田口さんの民宿をはじめ、田沢湖の周囲は受け入れた。ふて腐れた若者が宿にやってきた。そんな若者を夏の田沢湖、山、田んぼなどに自然の中に連れまわした。するとどんな突っ張った子でも素直になって帰っていくのだという。自然の中で自分のちっぽけさを痛感した途端に彼らの固い氷が解けだし素顔が表れる。それから毎年のように田沢湖周辺の民宿では中高生を受け入れ、彼らの心の氷を溶かした。田沢湖を通じた宿泊自然体験学習を展開するため、田沢湖周辺の民宿が会員となり、NPO 法人を設立したのがはじまりである。

そんな田沢湖を訪ねると山に囲まれた湖面が静かに光っている。美しい風景を楽しみながら湖岸を一周すると、湖の中に一際金色に輝く像が表れた。これが田沢湖の辰子姫である(図16)。この像の美しさには中毒性があるようで、ずっとここで眺めていたくなるような不思議な魅力がある。しかし像はどこか物悲しい顔をしている。(田沢湖にも伝説があるが、その話は次章で。)田沢湖はかつてクニマスが棲んでいた湖であるが、1931年以降、玉川温泉の酸性水が流れこみ、クニマスは絶滅してしまう。酸性に強いウグイは生き残り、現在の優占種となっている。クニマスが山梨県の西湖で発見されたのがニュースになったが、田沢湖に帰る日はいつだろう。

田沢湖の 辰子姫に寄り添う ウグイかな

- 八月十一日 田沢湖にて 古賀邦雄 詠む-

田沢湖で クニマスの帰り待つ 辰子姫

- 八月十一日 田沢湖にて 貴啓 詠む-



図 1 7 三湖伝説に登場する3湖沼

11. 湖と乙女、三湖伝説

ここまで色んな湖にも行ったが、小川原湖、十和田湖には乙女をモチーフにした像がある。湖に乙女の像がよく似合うのは湖の持つ静かさがどこことなく哀愁漂う女性の姿に重なるのだろう。

また、東北には十和田湖、八郎湖、田沢湖の3つに関する三湖伝説というものがある(図17)。

一、秋田県の鹿角に八郎太郎という男が住んでいた。ある日太郎達は山仕事に出かけた。食事当番になった太郎はイワナを捕まえて焼くが仲間がいない間に仲間の分まで食べてしまう。すると、急に喉が渇き始め、33夜川の水を飲み続け、いつしか33尺ある竜へと姿を変えてしまった。もう村には戻れないことを悟った太郎は川を堰き止め湖をつくる。これが十和田湖のはじまりである。

二、諸国で修業した南祖坊は十和田湖に差し掛かり、八郎太郎に戦いを挑んだ。南祖坊と八郎太郎は7日7晩戦い、最後は南祖坊が勝利する。太郎は住家を追われ、米代川を下り、途中で川を堰き止めようとするも地元の神々に邪魔をされてさらに下流へ向かう。行き着いたのは日本海付近で適地を見つけ天瀬川を堰き止めてできたのが八瀨である。

三、神成村(仙北郡)に辰子という類い希な美しい娘がおった。辰子はいつか衰えていくであろう若さと美しさを何とか保ちたいと思うようになり、観音菩薩に願掛けをする。菩薩は山深い泉の在りかを辰子に示す。お告げどおり辰子は泉の水を飲むが、急に激しい喉の渇きに襲われ、いくら水を飲んでも喉は乾くばかりだった。気がつくや辰子は自身が竜に姿を変えていることに気づき、自分の身に起こったことを悟った辰子は泉を広げて湖をつくった。これが後の田沢湖。悲しむ辰子の母が別れを告げる辰子を思い、松明を湖に投げ込んだ。これが田沢湖のクニマスになったという。

四、八郎太郎はいつしか辰子に惹かれるようになり、田沢湖へ毎年向かうようになる。辰子もその想いを受け入れるが、ある冬、南祖坊が田沢湖に現れ、辰子を巡って戦い、その結果太郎が勝利を収めた。それ以来、冬は辰子とともに田沢湖で暮らすようになり、主が半年間いなくなる八郎瀨は年を追うごとに浅くなり、田沢湖は冬も凍ることなくどんどん深くなっていった。八郎瀨が干拓されてしまった今、八郎太郎は一年中田沢湖に住んでいると言われている。(三湖伝説より概略のみ明記)



図 18 生内川大暗渠砂防堰堤



図 20 福祉の川として整備された子吉川



図 19 雄物川放水路（河口）



図 21 館内に併設された漕艇庫

1.1. 雄物川の砂防と河口の迫力（雄物川）

（NPO 法人秋田パドラーズ，秋田河川国道事務所，秋田県庁，湯沢河川国道事務所）

雄物川の管理は湯沢河川国道事務所と秋田河川国道事務所の上流下流の2つに分かれている。上流は砂防事業も多く行われている。出水で土砂が出やすいため、砂防堰堤が各所につくられている。雄物川の上流域の支流の生内川の砂防堰堤はかなり大きい。眼鏡橋型で魚道不要な上、堤体の上は人道橋になっており、手すりまでついている。こんな砂防堰堤は初めてだ。ここが子供達の環境学習の拠点となっており、土砂の捕捉施設でありながらいい親水施設を創出している。

また、雄物川本川には「NPO 法人秋田パドラーズ」が活動しており、カヌーを通して雄物川に親しむことができる。もともとゴミが多い雄物川の状態を憂いて、カヌーをしながら気づいたことから会を設立した。日ごろ岸から川を視るよりも川の中から見る方が気づかされるものが多い。

最後に河口。河口は基本高水流量 $9,500\text{m}^3/\text{s}$ とかなり大きな洪水に対応した放水路だ（図 19）。河口に文化的景観がないのは新設された放水路だからだろうか。事実、雄物川の旧河口は秋田運河の方である。

1.2. 日本初の癒しの川・福祉の川（子吉川）

秋田県をさらに南に行くと由利本荘市を流れる子吉川がある。アクアパルという子吉川の学習館を訪問し、「子吉川市民会議」の斎藤悟さんにお話を伺った。子吉川市民会議は旧本庄市中央公民館成人プロジェクト主催の「子吉川探報講座」に市民 22 名が参加し、スタート。陸上から拾えないゴミを船で拾うなどの活動を展開していた。こうした活動の甲斐あってか、2000 年には「川のきれいさ」4 年連続東北 1 位となる。こうした活動の積み重ねで 2001 年 12 月に子吉川市民会議が 30 団体及び個人 110 名の参加で設立された。

この川のもう一つの特徴として、『川の癒し』について着目し、川と福祉・医療の分野を関連付けた活動の取り組みが日本で初めて行われた流域でもある（図 20）。（秋田県本荘第一病院の小松寛治さんらが活動に取り組まれている。）川というのは洪水対策の場や水の供給の場だけでなく、川そのものの風景の美しさが人の心の健康を増進させる。

また、このアクアパルという建物は高校の漕艇部の漕艇庫も併設されており（図 21）、ここを拠点に練習し、過去何度もインターハイに出場する強豪チームが育っている。川の副次的効果は幅広い。



図 2 2 日和山からみた最上川河口



図 2 4 淡水魚の標本と岡部夏雄さん

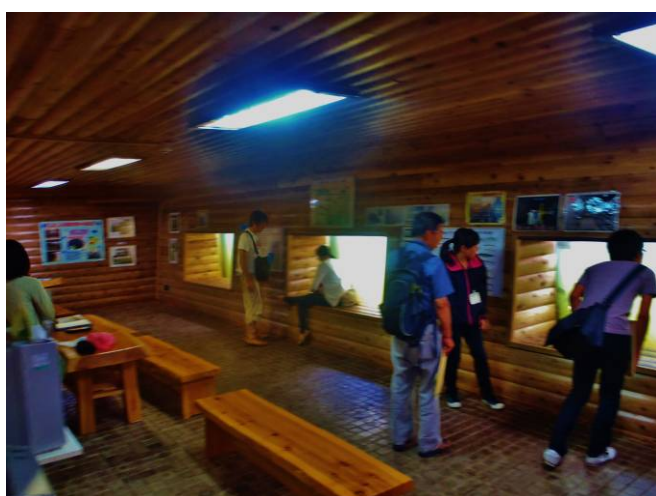


図 2 3 さみだれ大堰右岸側の水中側面に設置されたフィッシュギャラリー

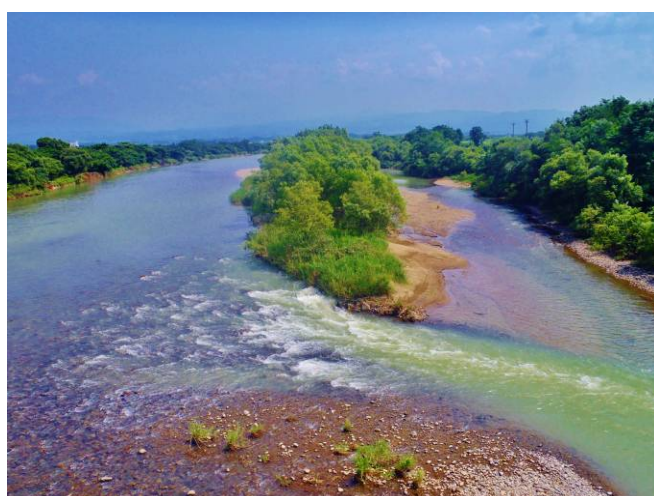


図 2 5 6歳の頃から愛し続けた赤川

1 3. 芭蕉も愛した最上川（最上川下流域） （酒田河川国道事務所、さみだれ大堰、新庄河川事務所）

6 日間の秋田県滞在を終え、山形県へ。酒田に宿泊し、早朝に最上川の河口の見える日和山へ。日和山とは、船の安全な運行を管理するため、設けられた見晴し台で、河口付近の小高い山にあり、全国に 30 近くある。その最も有名なのが最上川の日和山。

ここには松尾芭蕉も訪れて最上川の河口を眺めている。松尾芭蕉と最上川と言えば『さみだれを 集めて早し 最上川』という句が有名であるが、芭蕉は河口でこんな句を残している。

暑き日を 海に入れたり 最上川

一六八九年六月十四日 酒田日和山にて 松尾芭蕉

この日も暑い日だったが、芭蕉も同じように暑さを感じ最上川に涼を求めたくなったのだろう。

次に最上川さみだれ大堰を河川事務所の方に案内してもらった。ここには堰の右岸側の魚道を水中から覗けるフィッシュギャラリーがある。さみだれ大堰という名称にも芭蕉の句の面影が感じられる。

1 4. 6 歳の少年の夢今も色褪せることなく（赤川） （NPO 法人鶴岡淡水魚夢童の会）

最上川の下流域を見学したのち、一旦最上川を離れ鶴岡市へ。鶴岡市を流れる赤川はもともと最上川に合流していたが、洪水回避の目的で 1927 年に河道を分離させた。赤川（図 2 5）にある鶴岡淡水魚夢童の会の岡部夏雄さんを訪ねた。岡部さんは物心つくころから魚を捕まえるのが大好きで赤川でよく遊んでいたという。6 歳の頃から魚が好きという気持ちは変わることなく赤川に通い続けた。月山ダムの建設が決まった際に月山ダムのアセスメントを依頼され、魚種をサンプリングしている（図 2 4）。

「とにかく今の赤川にいる種のサンプルを取っておくことで将来、昔赤川にどんな種類のどんな生態の魚がいたか何かの役に立つかもしれないと思いホルマリン処理して保存しています。」と岡部さん。ここで、古賀河川図書館の古賀さん、「たしか、そういう趣旨で山形県内の淡水魚図鑑を出版した方がいたような・・・」、「あ、その図鑑出したの私です。」と岡部さん。「ええええ！あの本出したのあなたでしたか！私の図書館にも所蔵しています。」とそんなやりとりが。6 歳の童の夢は今も色褪せず、岡部さんの瞳の奥は 6 歳の少年のようにきらきらしていた。



図 2 6 最上川フットパスコースを示す標識

1 5. 最上川を活かしたフットパスコース (山形河川国道事務所/山形県庁/美しい山形・最上川フォーラム/NPO 法人最上川リバーツーリズム/長井ダム/長井市)

酒田から最上川を遡り、新庄を経て、山形市内へ。山形駅を降りると改札付近にはお盆ということもあって、帰省してくる人を待つ家族、友人の姿が、少しだけ実家が恋しくなる瞬間だった。

山形県庁、山形河川国道事務所を訪ねた後に、「美しい山形・最上川フォーラム」を訪ねた。この活動は山形県内で完結する流域である最上川を地域づくりのシンボルとして掲げて連携ネットワークを構築していくために 2001 年に設立された団体である。

また、長井市の野川まなび館にある「NPO 法人最上川リバーツーリズムネットワーク」は 最上川を一つの観光・地域資源として活用し、川から地域づくりを進めている。具体的な例が最上川を活用したフットパスコースの構築である。そもそも「フットパス」とは日本フットパス協会によると、以下のように定義されている。

イギリスを発祥とする“森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しむながら歩くこと【Foot】ができる小径(こみち)【Path】

イギリスから帰ってきた当時の河川事務所の所長さんが「最上川でもやってみよう！」と導入したのが最初だそうだ。

近年、日本でも各所でフットパスコースの構築が進んでいるが、川をコースの中心として取り組んだのは最上川が最初である。

川は線的かつ面的で、恒久的な資源であることからリゾート開発のような地域の疲弊リスクを伴わない地域・観光のあり方が体现できる。僕も一度ゆっくり最上川フットパスを歩きに行きたい。

ところで山形県庁を訪問した際に「川系男子」について県ブログで紹介してくれたので、URL を掲載。

<http://tsunakanyamagata.n-da.jp/e467811.html>



図 2 7 津波が遡上した北上運河

1 6. 進む復興と北上川の河川史(北上川) (水と緑の環境フォーラム・ものう/北上川下流河川事務所)

山形を後にし、宮城県石巻市へ向かった。東日本大震災で津波の被害を受けた石巻市は街の中を通っていると津波の面影はよく分らない。ただし、ホテルが 2 階建てのプレハブであることやアスファルトの色が新しいことなどからここら一帯も被害を受けたことが容易に想像できた。町からはどこからも海なんて見えないのに、ここまで海水がどこからともなくやってきたことを考えるととても恐ろしい。

朝市で石巻市桃生の「水と緑の環境フォーラム・ものう」の白石定利さんにお会いした。白石さんは北上川流域連携交流会のメンバーでもあり、北上川流域の石巻の連携を支えるコアパーソンだ。北上川は岩手側から流れ、宮城まで流れる約 250 km の大河川だが、上下流交流が非常に盛んで、北上川の岩手側から下ってきた人達に石巻の野菜をお土産にたっぷり船に積んであげるなどユニークな交流をしている。白石さんにお話を聞いたあと、北上川の脇谷洗堰付近を案内してもらった。旧北上川が流れているが、流量が非常に多い。北上川の場合は旧北上川と北上川放水路の分派比は 9 : 1 で通常時は旧北上川の方が流量が多いそうだ。

北上川下流河川事務所を訪問した際、事務所の方から北上川下流河川事務所の前にあった北上運河も水が逆流し、河道からあふれたという話を聞いた(図 2 7)。

この北上川は河川史を紐解くと何度と付け替え事業をおこなってきており、大変複雑な河道形成の河川史を有する。今回東日本大震災で北上川下流域は津波が遡上し大きな被害を受け、今回のことをきっかけに北上川下流に新たに堤防をつくることになった。復興とともに新たな北上川の河川史が刻もうとしている。



図 2 8 広瀬川



図 2 9 阿武隈川(福島市内)

17. 東北地方の川と水・環境ネット東北(水・環境ネット東北/宮城県庁/東北地方整備局/仙台河川国道事務所)

北上川を後にし、仙台市内へ。今回名取川と鳴瀬川は本川こそ通ったものの、じっくり寄る時間はなかったのもまたの機会にゆっくり訪問したい。東北の各河川のあらゆる団体を巡ってきたが、東北地方の各河川で連携を構築してきた団体がある。仙台市に事務局がある「水・環境ネット東北」である。

お盆ではあったが、水・環境ネット東北の高橋万里子さんがわざわざ宮城県庁までお越しいただいた。

この会は 1993 年 8 月に設立され、ちょうど 20 年目で大変歴史のある会だ。

最上川や北上川のように流域のネットワークがしっかり構築されている団体は東北には少なく、個々で活動している団体が多いようだ。逆に地方単位のネットワークがあるのは九州と東北くらいではなかろうか。

高橋さんに県庁でのヒアリング調査にご協力いただいた際に、「ぜひ広瀬川(名取川の支流)にも寄ってみて。」と言われたので夕方に立ち寄ったが、土手沿いに続くほどよい大きさの散歩道は、日常の中で散歩したくなる川だ。川面も静かで山の向こうに沈んでしまった夕日の余光を静かに映し出していた(図 2 8)。



図 3 0 荒川(阿武隈川水系)の霞堤

18. 阿武隈川の河川活動への弊害(福島河川国道事務所/ふるさと川・荒川づくり協議会/猪苗代湖)

東北地方最後の水系、阿武隈川水系へ(図 2 9)。福島市内へ宿泊。阿武隈川での活動について国や県の河川管理者の方にお話を聞いていると少し驚く話を聞いた。阿武隈川水系の地先でも放射線濃度が高いところや刈草の処分先が見つからない問題などがあり、堤防の除草ができない箇所がある。堤防の除草は重要な河川管理の一環であるが、それができないのは福島県周辺の課題になっている。

阿武隈川水系の支流に荒川があり、荒川のそばの荒川資料館で活動する「ふるさと荒川づくり協議会」を訪ねた。この日は事務局の橋本さんに対応していただいた。この会は荒川の自然・歴史を上流、中流・下流と地図にまとめ、情報発信を行っている。また、荒川の各所に計画的に参加者を配置して行うクリーン作戦や定期的な魚種や昆虫のモニタリングなど行っており、その甲斐あってか 3 年連続水質日本一の河川に選ばれている。(残念ながら本川阿武隈川になると順位は 60 位くらい下がるという。)また、この会が何より素晴らしいのは、荒川に残る当時の水防技術をしっかりと記録に残しており、それを資料館を通じて情報発信していることである。

荒川は古くより、大岩の転がる暴れ川であるため、荒川には連続して床固め群が形成されている。なにより素晴らしいのは荒川右岸側の水辺林の中に霞堤が各所に残っている(図 3 0)。古賀さん曰く「これは保存状態のよさでも日本一の霞堤ではないか」とおっしゃっていた。

荒川に 信玄も圧巻 霞堤

—八月十六日 阿武隈川水系荒川にて 貴啓 詠む—

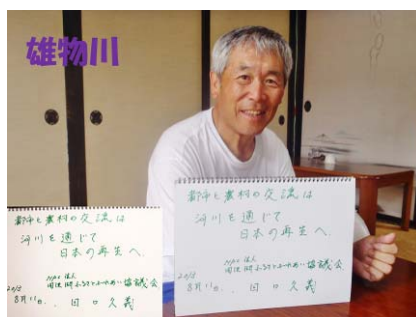
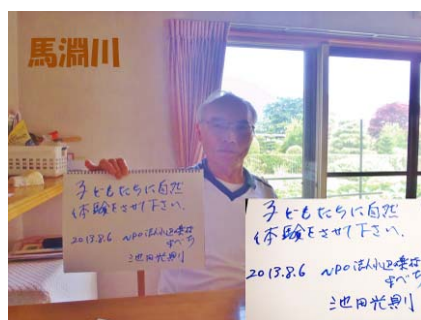
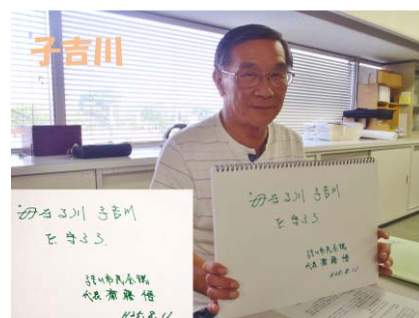
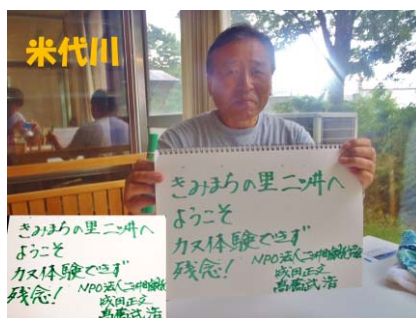
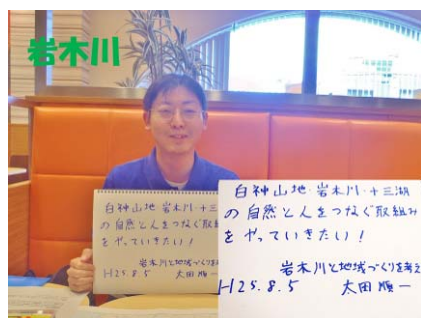
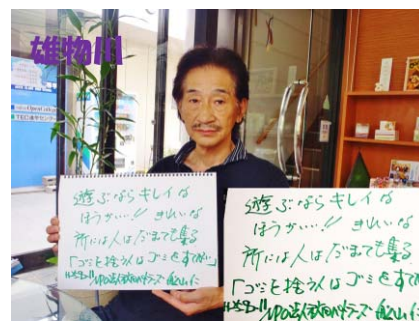
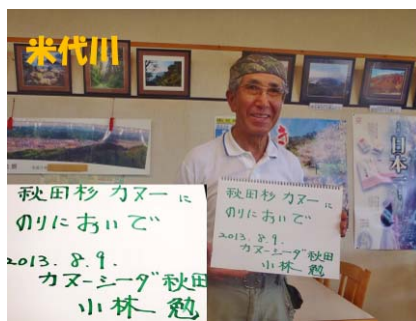
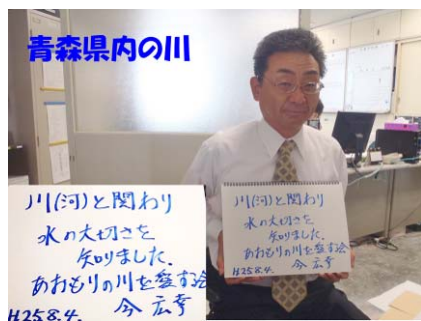
今回一つ一つ経緯についてお話を聞く中で、会の橋本さんから「あなたの質問を受ける中で我々の会の目的はなんだかったか、何を目指していくべきかなど振り返るきっかけができた。訪問に感謝。」と言っていただき調査日和に尽きた。

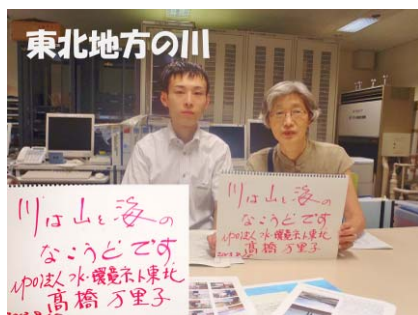
19. おわりに

8月4日から旅をしてきて13日間。毎日移動しても、しきれないほどの距離を移動したと思う。ざっと鉄道と車の移動の距離を足し合わせても2,000 kmは超えているだろう。

今回お盆というお忙しい日程にも関わらず、東北の市民団体の方々、各河川事務所の方々、各県庁の方々などはじめ多くの方々にお世話になった。この場を借りて感謝申し上げる。そして何より東北地方の全行程と一緒に旅をしてくださった古賀河川図書館の古賀邦雄さんに感謝申し上げる。毎晩「今日の川の〇〇がすばらしかった！」と感動を共有できたのは何より楽しかった。また、お盆時期にも関わらず、助っ人として駆け付けてくれた友人の山本和也君、中前千佳さん、川合君穂さんに感謝します。

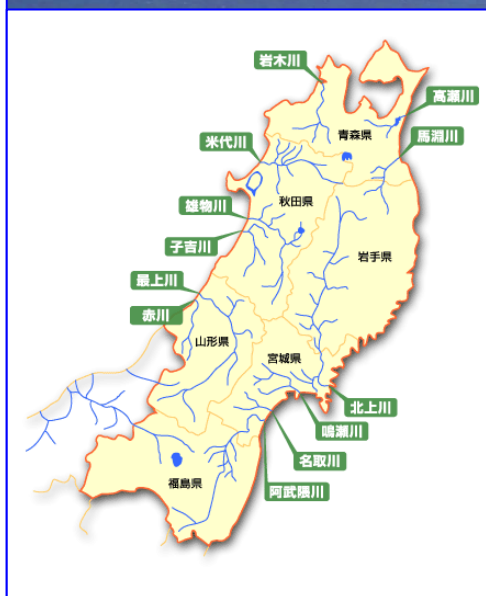
毎日見知らぬ川の景色に感動し、もう満足・・・と思いつつ、まだ一つだけ心残りがあった。それは今回まだ一度も水の中に入っていない。最後に向かった猪苗代湖（安積疎水側）の湖水浴場で3分だけ水に浸かり、奥の川道の旅路を終えた。





- ・滞在日数:13日間
- ・東北総移動距離:約2,000km
- ・ダムカードの獲得枚数:3枚
- ・行った湖沼の数:5湖沼
- ・訪ねた河川事務所:12機関
- ・名刺交換した人:51名
- ・旅をサポートしてくれた友人:4名
- ・出会った行政の人:31名
- ・出会った市民団体数:16団体
- ・旅で出会った人:150名以上

川系男子の 東北地方『川と人』めぐり



【筆者について】

坂本 貴啓 (さかもと たかあき)

1987 年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代ではJOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢めている。

筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには川の河口を視ること。